

日中若手研究者フォーラム(中国・北京師範大学)に関する報告

2009年3月18日 関西学院大学大学院社会学研究科 大学院 GP 事務室

1. 目的とスケジュール

以下のスケジュールで、北京において学術交流フォーラムおよび共同調査の打ち合わせ兼視察を実施した。

○ 出張目的：

北京師範大学(以下 BNU)民俗学国家重点学科と関西学院大学大学院社会学研究科(以下 KG)大学院 GP プログラムによる学生交流フォーラムおよび共同調査に関する打ち合わせ兼視察。

○ 出張人員：

傲登、木原弘恵、稲津秀樹、崔海仙、林梅、谷村要、山北輝裕、荒木康代(研究員・院生)、島村恭則教授、西村正男准教授、中川千草(GP 事務室)、

○ 目的詳細：

今回の目的は大きく2つに分けられる。ひとつ目は、研究報告を通じた学術交流である。日中双方の学生による研究報告、日中の教員による景観調査に関するレクチャーを通して、民俗学と社会学というディシプリンの現代的関心、研究環境や背景を学ぶ機会を設け、国際的な学術交流のノウハウを身につける。ふたつ目は、北京市および西宮市で今後予定されている共同調査に向けての打ち合わせと視察である。北京市前門や鼓楼付近の胡同(路地)を実際に歩きながら、現地の政治・経済・文化状況に触れ、今後の共同調査を計画する。

○ スケジュール：

＝3月11(水)＝

- ・NH159 便にて関西国際空港から北京へ移動。

宿泊：3月11日から3月17日まで、北京師範大学内、励○学苑

＝3月12日(木)＝

- ・8:30～9:30 北京師範大学文学院・主楼 700A

教育部国家重点人文社科研究基地・BNU 民俗典籍文字研究中心副主任 李国英教授挨拶

BNU 文学院副院長 刘洪涛挨拶

中日研究代表挨拶 (稲津秀樹/孟凡行)

BNU 側の参加者紹介 (色音教授) /KG 参加者紹介 (山本早苗)

集合写真撮影

・ 9:00~11:30

GP グラムの構想説明 (中川千草)

BNU 民俗学社会発展研究所の研究者養成構想 (蕭放教授)

西宮市の景観調査に関するレクチャー (島村恭則教授)

北京市前門胡同調査の紹介 (董晓萍教授)

・ 14:00~17:00

教員、院生、研究員による研究報告 (朱霞副教授、張勃、木原弘恵、傲登、吴丽平、林梅)

=3月13日(金)=

・ 9:00~11:30

院生、研究員による研究報告 (稲津秀樹、周錦章、崔海仙、唐超、中川千草)

・ 14:00~17:30

院生、研究員による研究報告 (荒木康代、梁自玉、谷村要、山北輝裕、孟凡行、山本早苗)

=3月14日(土)=

・ 午前 北京市企画陳列館見学

・ 午後 北京民俗博物館見学

=3月15日(日)=

・ 午前 前門付近の商店街/胡同視察

・ 午後 北京市内散策

=3月16日(月)=

・ 午前 鼓楼、什結海付近胡同視察

・ 午後 北京市内散策

=3月17日(火)=

・ NH160 便にて関西空港へ。

2. 研究報告会について

2日に渡り開催された研究報告会は、BNU、KGの参加者の紹介、GPプログラムの構想やBNU民俗学社会発展研究所の研究者養成構想説明などからはじまった。次に、今後の西宮調査に向けて、民俗学的な景観・地形考察に関するレクチャー(島村教授)、BNUが実施した前門胡同調査の紹介(董晓萍)を経て、両機関の教員・学生の研究報告および質疑応答が行われた。各自の報告タイトルは次の通り。

張勃 On the Visual Angle of look-up in Folklore Study

木原弘恵 A Community's Practice of Conserving a Cultural Treasure

傲登 Inner Mongolia issue of desertification and people's livelihood

- 呉 麗平 Partita of Block Living Space : Historical Recollection and Modern Reconstruction of Dongsu Block of Dongcheng District Beijing
- 林 梅 History and living environment of Jilincun
- 稲津秀樹 Toward Sociological fieldwork on Immigration and Surveillance: With a focus on daily lives of newcomer laborers from Latin America in Japan
- 周 錦章 Beijing Dadetong Draft Bank: A Fieldwork Survey in Qianmen District
- 崔 海仙 The Third Possibility of Urban Korean : in Beijing identity transformation of Korean Chinese
- 唐 超 The Ethnography of the Traditional Handmade Papermaking Workshops in Baizhi Fang, Xuanwu District, Beijing
- 中川千草 Japanese youth living life-world beyond music activities
- 荒木康代 An Examination of Wives of Merchant Families : transition from managers to housewives
- 梁 自玉 Research of Cultural Change and Tourism Development: A Case Study On Fenghuang County Hunan Province West
- 谷村 要 The Spread of Media Expression Activities by Internet Users
- 山北輝裕 Homeless People in Japan / Street Community / Participant Observation
- 孟 凡行 The Structure and Changes of Traditional Folk Implements: A Case Study on Traditional Folk Implements of ChangJiaoMiao In LiuZhi County GuiZhou Province
- 山本早苗 Ceremonial National Development and Mentality of Folk Society in Global Age : A case study concerning project of construction of terrace paddies in Gansu province
- 馮彤 Fabrication Process of “Washi” (Japanese paper)

各報告は通訳を介して 20 分程度であり、質疑応答の時間も十分とれなかったものの、本報告会は、双方の学術的背景を把握する機会となったといえよう。また、社会学／民俗学というディシプリンの違いや、中国語／日本語という言語の違いがあるなか、学术交流することの意義は大きく 2 点あったと言える。ひとつは、その<違い>の実感である。伝えたくても伝わらないもどかしさ、伝わっているかどうかさえも分からない不安は、日本国内における発表よりも一層強く感じる。参加メンバーの多くは、フォーラムの前半において、この事態にたいし安易に妥協したり、諦めたりと消極的な態度をとった。しかし、この件について議論することにより、筆談や英語を交える努力をする、時間をかけて話し合うという積極的な姿勢が醸成されていった。国際発信能力の涵養という点において、大きな成果があったと感じる。

ふたつ目の意義は、学術背景や環境が異なるなかで、共通項を探り、そこから信頼関係を構築する経験ができたことである。フィールドワークという共通の調査手法を軸に、調査地のできごとを語り合うことは、同じ学問の地平に立つものとして、また、今後予定されている共同調査の仲間としての関係づくりに大いに役立った。2 日間に渡り開催された研究報告会では、報告時間に限りがあったため、十分に議論できなかつた。しかし、夕食やその後の自由時間に BNU の学生たちと会話する機会があったことで、相互理解はいっそう深まった。またその「Off time」での交流や関係性が、「On time」に

もフィードバックされ、学术交流の活性化が図られたといえよう。以下に、参加者それぞれの視点で、研究報告会およびその前後でもたれたインフォーマルな学术交流のレポートを記す。



研究報告会の様子 (撮影者：稲津秀樹)

【傲登 (M1)】

今回、いろいろなことを勉強することができた。これまで耳にしながらか、あまりなじみのなかった「民俗学」を学ぶことができた。師範大学の報告の中に「民具」に関する研究があった。その内容は繊細で、中国の少数民族の農業、生活、娯楽に使われている道具を研究することによって、歴史、社会、身体分析を試みていることに感心した。また、「視線を上げる」ということをテーマにした発表も印象に残っている。私たち社会学研究者の多くは、社会問題を「発見」し、その現場を研究対象としている。一方、この発表では、ある意味社会問題の「外側」に位置すると思われる「官僚」たちがどのような政策を採り、どのように民間の出来事に干渉しているかに注目していた。社会問題の分析には、このような視点も不可欠である。また、KG 院生の発表に、BNU の院生たちは興味を持ってくれているようだった。質問の内容から、BNU の院生たちの理論知識の基礎が強いことが分かった。私たちが社会学に限らず、隣接分野の理論知識の基礎を一層学ぶ必要がある。特に、BNU と共同研究する上では、民俗学の知識を充実させなければならないだろう。

BNU の院生たちの大半は、KG の参加メンバーよりも年齢が若い。若いからこそ、私たちと違う問題意識を持っている。問題関心も異なる。異なった感覚の交流という意味もあった。

今回の学术交流は、社会学と民俗学との交流という点でもとても意義がある。双方に新たな研究の道を開く可能性がある。

研究報告の通訳は初めての経験として、いい勉強になった。同時に通訳の面を含めて至らなかった点がたくさんあり、自分の勉強不足を改めて感じた。

【木原弘恵 (M2)】

今回の中心的行事でもあった研究報告会における島村先生の発表は、次回の BNU の方々の来訪に向けたもので、現在の日本の民俗学という学問の状況、そして西宮の景観から見えてくるものを提示する興味深いものであった。そのほかの発表も発表時間が短いにも関わらず (通訳時間を含めて 20 分)、

各々の常日頃の研究をコンパクトにわかりやすく提示するものであった。

研究報告会に限ることではないが、差異について考えさせられる場面が多かった。それは主なものとして言葉とディシプリンがあげられよう。差異についての課題は、このようなプログラムを実施しようとした場合に多かれ少なかれ生じる問題であろう。最終座談会の前に KG 側でミーティングの場を持った。そこで皆が今回の訪問での各々の思いを語り合い、様々な差異と共通項が提示された。このプログラムの中で差異と共通項に自覚的になる行程を持てたことで、少なくとも報告者は今後、差異を仕方ないものとして受け止め、思考停止させてしまうことはないだろう。そういった意味においても、「前向き」な意思を与えられた訪問であった。

KG 側は出発前、発表練習の機会を設けた。事前にこのような機会を設けた成果が北京での発表であらわれていたように思う。発表技術は、個人が様々な場で発表を重ねる中で身につけていく知識である。そのため対外的な発表機会の少ない前期課程の学生にとっては、早期におけるこのような発表練習の機会は、今後の研究発表にも役立つものであるだろう。

途中で BNU の参加者とのコミュニケーションがうまくいっているのか不安になることがあった。様々なアクターが複雑に絡んでいるためどうにもならないこともあるのかもしれないが、今後は、聞き手の状況を把握し、それに応じた発表をするなど、よりよい議論ができるように工夫したい。準備段階でお互いの情報を交換し合うことができれば、この課題に対処できるだろう。

【稲津秀樹 (D1)】

報告前の挨拶では、いい意味での互いの「違い」をぶつけあっていきたい、という思いの丈を述べた。しかし、研究発表の場では、社会学・民俗学のアプローチのみならず、日中で共有できているコンテキストの違いというものが想像以上に表面化し、参加者の間で、「これからどのように共同調査をやっていけばいいのか」といった戸惑いが生じた（そうした中、言語的な違いのみならず、学問的なディシプリンの差が、特に、通訳の方々にかかる負担は大きかったように思える。この場を借りて、両者の間をつないでくださった通訳の方々に感謝申し上げたい）。

だが、2 日目、3 日目の夜に院生たちで設けた晩さんの場での盛り上がりによって、そうした不安は徐々になくなっていったといっても過言ではない。特に、3 日目の夜では、BNU 側の院生たちが次々と自分たちの出身地における伝統歌を披露してくれ、その歌声の美しさに酔いしれるとともに、我々の方もお返し之歌を歌わねばならない・・・という時になって、改めて、伝統社会から切り離されたところに存在している自分自身の根なし草ぶりを思い知らされる思いだった。

互いの交流の中で、徐々に BNU 側の院生が、日本の民俗学のみならず、社会学などの関連分野にも精通していたことがわかってきた。一方で、KG 側の院生・研究員に総じて言えることだと思うが、北京という都市や中国の民俗学に対する事前学習が不足していたことに恥ずかしさを覚えるしかなかったことは、反省したいところである。ゆえに今回の学術交流は、自身の研究に対する「幅」を広げていくことへの強い意欲を頂けた意味で、非常に有意義なものであった。次回の訪問までには語学学習を含めてしっかりと学習会を企画するなどして、反省を生かしていきたいところである。

【崔海仙 (D3)】

BNU は主に民俗学であり、KG は社会学であることから、それぞれの研究分野や視点及びプロセスが

異なったが、その内容は非常に豊かであり、「異なる」ことこそその中で学んだことは多かった。

特に、BNU 側の「ものから社会を見る」視点は、私にとって刺激であった。これまで中国朝鮮族をめぐる都市のエスニシティ研究をしてきたが、常に抽象的な領域を携わることが多い、データに関してもより詳細な整理ができないことから戸惑ったことが多かった。しかし、BNU の院生らの示した民俗学的プロセスや、「小さくて細かい、具体的なもの」を微細に観察し、分析する方法に衝撃を受けた。人間生活の日常生活に着目し、その生活と直接かかわる民具や塩、紙などの実態にたいして詳細に説明する。そして、人々の生活や環境、歴史などと結びつけ、さらに社会全体を分析していく方法論は非常に説得力があった。私も、具体的な現象あるいは具体的な「もの」に着眼すれば、これまで解けなかった問題を新たな切り口から分析することができるのではないかと考えるようになった。民俗学的アプローチを再考して自分の研究に帰結することも可能であることが、今回の発表会を通じて得た一番大きい収穫である。

【林梅 (D3)】

相互の発表から多くのものを学んだ。ひとつは、BNU の発表者には、民具などものの変遷から歴史と社会を見るということである。この点は、私から見ると新鮮な発見で、社会学もこのような展開ができるのではないかと思った。二つ目は、非常に文献研究に熱心であることだ。このことは私自身もとても足りない部分で、その重要性をもう一度感じ。こういった相違点に対して共通点も見られた。たとえば、フィールドワークでぶつかる障害などである。このような共通点を切り口に新たな共同研究の展望が開けると考えた。発表に関する質問には非常に鋭いものがあった。ただ時間関係で十分な議論ができなかったことが残念だった。

学術交流を通じて国境を超えることには、想像以上に時間と忍耐が必要となること、信頼関係を築いてこそ、真の交流につながると感じた。

通訳を担当した私としては、その困難さを感じた。ひとつは、社会学並びに民俗学の中国語の不十分さ、二つ目は、中国民俗学に関する理解が不足である。しかし、通訳としての能力を鍛える機会であったと思う。

【谷村要 (研究員)】

研究報告会では、発表時間が通訳の時間を含め 20 分と必ずしも多くなかったため、KG 側・BNU 側双方とも自身の簡単な研究紹介に留まる内容となった。

報告会の初日などは、民俗学と社会学のディシプリンの違いにとまどったが、モノ (民具) を通して、人々の伝統的な文化 (way of life) を探るといふ考え方には我々も学ぶべきところは多かった。また、BNU 側の発表の視点や後の前門に関する調査の際にも強く感じたが、中国政府は自国の伝統文化並びに景観を観光産業 (さらには、自国のソフトパワーの向上) のコンテンツとしての活用をもくろんでいると思われる。民俗学の研究はそのコンテンツの「記録」という側面があり、また一方でそのコンテンツの「売り文句」をも作り出しているのではないか。BNU の院生側との交流で、「民俗学」が現在の中国において非常に「ホット」な学問領域であると聞いた。そこにはこういった背景も関係しているのではないだろうか。

【荒木康代(研究員)】

BNU は民俗学、KG は社会学ということで、両者の関心や研究視点、アプローチなど多くの違いがあったことに加え、日中の政治・経済・社会・文化的違いなど、双方の違いを確認することができた。お互いの発表を完全に理解できたとは必ずしもいえないが、その違いによってお互いの調査方法のメリットを吸収すると同時に、自らの研究についても反省的に省みることができたように思う。

BNU の発表が示した、文献や民具等具体的資料による非常に緻密で根気のいる作業を通じて社会の変化を探るという研究方法は、モノから社会を見るという視点を提供してくれた。このような視点は、私自身の研究にとっても非常に興味をひくものであったし、日中双方の政治・経済その他の違いからくる研究や関心の違いも、自らの研究の狭さを自覚させてくれるものであった。このことは、今後共同調査をしていく上でも、両者にとって大きな刺激になるのではないかと思う。

反省点としては、事前の勉強不足のため発表内容を十分に理解できていたとは言えないことである。この原因は、BNU 発表者のアブストラクトを事前に読むことができなかったことにもあるが、同時に政治経済体制を含めて、中国や北京、前門に対する私たちの事前の勉強が著しく不足していたこともあげられる。このことから BNU 側の発表に対して的確な質問ができなかった、また逆に質問に対しても明解な回答ができたとは言えなかった。その一方で、発表、ディスカッションともに時間が十分でなかったため、盛り上がりそうなところで打ち切りざるを得ないなど、スケジュールが窮屈であったこともあげられると思う。

【山北輝裕(研究員)】

まず、KG 勢の発表は、パワーポイントの技術も高く、そのかいあってか、BNU 側からの質問は鋭かった。質問に対し、思わずその場で、拍手をおくった。当初、「自己紹介」という程度の発表と聞いていたが、なかには、分析的な発表をしているメンバーもあり、それはそれでよかったと思う。ただし、BNU 側の質疑に対する KG 側の応答がちゃんとなされていたかという点微妙だった。

個人的には、日本の「ホームレス」が中国で通じるのか、若干の不安はあったが、過去に、韓国の露宿者と日本の野宿者の交流を現場(参与していた団体の)でおこなった経験から、定義さえしっかりしておけば、わかってもらえるだろうという感覚もあった。わたしは、通訳を介さず、自分の言葉で、なんとか伝えたいという思いから、途中何度か、きわめて拙い英語を披露した。そのかいあってか、場はリラックスした雰囲気になり、発表に興味をもってもらえたようだった。発表後、夜の交流でも「ホームレスになった人の家族はどうしてるの?」「参与観察のなかで、野宿になったことはある?」などなど、質問をたくさんしてくれた。歌と踊りと酒だけが国境を超えていた私にとって、学問で国境を超えたことはこのうえない幸せであった。

逆に、KG 側から、中国の民俗学に質問があったかという点、さほど活発にはなかったように思う(自分は1回も質問していない)。民俗学では、どのような議論がなされるのか、という、そもそもの感覚が皆無だったようにも思う。また、こちらの勉強不足もあるかと思う。たとえば、BNU 側に、銀行の研究をしている院生がいたが、金融システムを日本が壊した歴史もおそらくあったはずだ。中国および日本の歴史的な背景を踏まえる必要があったと、痛感した。やはりそこに尽きると思う。

夜の交流会で、BNU の院生はさらに、活発であった。入試の際は、社会学もひととおり勉強したことなどを聞く。また、今回の発表者以外の院生は、かなり深い参与観察をしているという事情も知った。

対象をいかにして描くか、という実践的な問題も抱え、奮闘していることがわかった。だからこそ、初日の関学勢の「切って捨てたような態度」には赤面するばかりであった。

通訳・時間という制約のなかで、インフォーマルな交流も交えながら、あれだけの議論ができたことは、有意義であったと思う。むしろ、KG 勢が学ぶことが多すぎるように思う。言語の面も含めて、悔しさだけが残る。



夕食での交流 (撮影者：谷村要)

【山本早苗 (研究員・BNU 文學院 高級研修生)】

島村教授によるレクチャーでは、景観を民俗学・社会学の視点から読み解くための視点の設定のしかたと方法論をわかりやすく解説された。豊富な写真をもちいての報告であったため、BNU の院生にとっても、視覚的なイメージを共有しやすく、刺激的な内容だった。ただし、日本のフィールドワークの理論と方法論についての解説があれば、その後の議論がより展開できたと思われる。つづいて、西宮の景観調査の比較調査対象地となる前門地区について、董晓萍教授が、BNU による前門調査について報告をおこない、前門地区の歴史と課題を共有した。午後からは、朱霞副教授と張勃講師の研究報告を先におこない、BNU の先生方の研究内容を理解する場となった。

日中双方の院生 (修士、博士) と研究員、PD の研究報告を、それぞれ通訳をふくめて報告 20 分、質疑応答 10 分の時間配分でおこなった。通訳を介しているため、実質 5 分程度の質疑では、内容に踏みこんだ議論にまでいたらなかったが、お互いの研究内容やその背景にある理論、方法論の概要を理解し、お互いのディシプリンや調査方法の差異を確認することができた。

KG 組は、パワーポイントで写真や映像など視覚的資料を効果的にもちいた非常にわかりやすい発表だった。また、丁寧なフィールドワークの実践や研究テーマの広がりやユニークさという点からも、BNU の院生にとって大変刺激的な内容だった。BNU は、準備不足な面が目立ち、パワーポイントや報告内容をさらにブラッシュアップしていく必要をつよく感じたが、非常に緻密な文献調査と着実な研究報告をおこなっていた。

今回とくに印象的だったのは、学会報告経験がない修士課程の院生たちが、よく準備された英語のパワーポイントで、わかりやすい報告をおこない、冷静に質疑応答に対応していたことだ。研究員や

博士課程院生らの協力と指導によって、院生たちが大きく成長していることを強く実感した。研究会後のインフォーマルな交流会では、日中の院生・研究員たちが、お互いの研究内容について質問しあったり問題を共有しあい、プロジェクトの運営や日中間の差異・共通点や今後の展開などについて貴重な意見、コメントを提供してくれた。

また、通訳を担当した林さん、崔さん、傲登さんは、KG の報告通訳のほか、ディスカッションでも非常に的確な通訳をしてくれた。わたしに限らず、BNU の院生はみな、KG のチャレンジ精神と真摯な研究姿勢に大きな刺激を受けた。

3. 共同調査に向けての視察について

視察 1 日目は、北京市企画陳列館および北京民俗博物館を訪れ、北京というまちの歴史と文化を学び、オリンピックによって大きく変化を遂げた北京の「いま」、またそこにいたる歩みについて知ることができた。視察 2 日目には、2 グループに別れ、前門付近の商店街と胡洞を歩き、人びとの生活や観光産業の現状を観察した。政府による観光産業の推進が与える影響は、まちの景観にあらわれており、消し去った（であろう）ものと根強く残りつづけるものとのコントラストが印象に残った。3 日目は場所を変え、鼓楼、什刹海付近の胡洞に足を運んだ。旧来の家屋や生活スタイルを垣間見ながら、一方で外国人を対象とした観光開発の現状を肌で感じた。

個別行動の時間には、地下鉄やバスを乗り継ぎながら、それぞれの研究の関心にもとづき、北京のまちを歩き回った。個別行動をすることにより、「展示」というかたちで表象される「あたらしい」北京、政策の転換が残した痕跡（開発から保護へ）などを実感し、今後の共同調査におけるイメージはよりクリアになったといえよう。KG の参加者はこの 3 日間を通して、日中双方での共同調査の意義と課題を発見していった。



前門付近の市場
(撮影者：木原弘恵)



前門の商店街
(撮影者：荒木康代)

【傲登 (M1)】

胡洞に住んでいる人たちに実際にインタビューすることはできなかったが、北京の胡洞を歩くだけでも、現代化の波に巻き込まれていくまちの変化、その波に乗っていない点を垣間見ることができた。それは、街の景観のバランスとしてあらわれていた。

【木原弘恵 (M2)】

初日の15日、私は胡同をめぐる班に入り、開発の進む北京の街並を観察した。BNUの色音先生の解説を聞きながら、変わりゆく四合院においてどのような生活が営まれているのか想像が膨らんだ。途中で立ち寄った活気のある市場の様子は、(あたりまえであるが)確かにここでは生活が営まれているのだという実感がわくものであり、変わりゆく街での生活へ関心がさらに高まった。16日はBNUから程遠くないところにある胡同を観察しながら鼓楼付近まで歩いた。この日は観光地化した場で商売を営む人々の生活への想像が膨らむものであった。

【稲津秀樹 (D1)】

北京という都市が見せつけてくれる、魅力の数々には驚かされるばかりであった。そして、それらは個人的には、私の研究テーマである、移民と監視社会の問題と深く結び付いていたものであった。

例えば、町で目にする公共空間における監視デバイスの浸透であった。我々が宿泊していた大学の宿舎前の大通りをはじめとして、商業施設、学校、観光地、さらには地下鉄の車両の中に至るまで監視カメラが適宜配置されていた。更には、地下鉄の駅や博物館の入口、天安門に続く地下道といった場所では、おもに公安によるセキュリティチェックを行う場所が設けられているなど、日本以上に国家介入がなされた監視体制を観察できた。だが、学校周辺に設置されているカメラの場合、地域からの都市への出稼ぎ民への不安を背景に、子どもを守る目的で設置されているらしいといった話を聞くと、そこには日本の監視社会研究の議論を彷彿とさせるものがあつた。

前門地域周辺を歩いたことは、非常に大きな刺激だった。前門地域は、天安門広場の南にある大通りを中心に、現在、商業地域としての再開発の真っ最中であつた。もともと明代から存在するこの商店街は、現在、フランスのあるデザイナーの手によって、発足時から現在までの歴史的建築物をモチーフにした建物を再現させながら、次々と建設が進められていた。我々が訪れたのが朝も早かつたため、大通りにそって走るちんちん電車に人はあまり乗っておらず、開店していない商業ビルも数多く見受けられた。そして人通りも、まだ、まばらであつたという印象を受けた。

しかし、目隠しとも進入防ぎともいえる通り沿いの壁の裏手には、開発によって失われようとしている、伝統的な四合院づくりの家々が残る胡同というストリートで今も生活続ける人の姿があつた。興味深いのは、前門のメインゲートから向かって左手にある片方の胡同は再開発によって、強制的に立ち退きが迫られている一方で、大通りがある区域から一本、道を隔てたところにあつたもうひとつの胡同は、人々が市場での交換を通じて活発に生活を続けているものの、そちらはむしろ観光の対象となっていることであつた。

よって、ビデオカメラで通りの様子を撮影していても、目立った反発というのは私に直接的に向けられることはなかつた。最初は、誰かしらに絡まれはしないかどうか、非常に不安に思っていた私は、宿舎へ帰った後、安堵すると共に、自身がビデオカメラによって、人々に「まなざし」を向けていた

ことへの痛烈な反省に襲われた。観光という名のもとに進んでいる、前門大通りの再開発と、その裏手で犠牲となっていたり、また一方で観光によって生活を組み立てている低所得者層の暮らしを編成しているのは、中国という国家による開発の側面ももちろんのことながらも、カメラを手に携えた私のような「観光者」によるものなのではないのか、と。

帰国した今でこそ、このように振り返ることができるが、現地ではこうした疑問をうまく言葉することができなかった。また、このようにカメラを手に携えながら歩くことで、私自身の北京という都市に対する問題意識を深めることができたが、調査倫理という面においては、「観光者」気分カメラを携えていた自分自身がいたことは間違いない。この点は、北京の調査に限らない「調査者」としての自覚の問題として、今後ともしっかりと受け止めたい。

【崔海仙 (D3)】

北京の中心地、二環あたりに位置する前門と保護あるいは再建された胡同を見学することによって、伝統と近代が同じ空間で並存する北京という都市空間の景観をより一層知ることができた。この地域はとも近代化が進む三環あたりと対照的に、昔のまま残された胡同や壊されつつある胡同の痕跡が同時に存在した。そして、依然として人々が旧来の住宅に住みながら、近代科学の便利さを満喫するライフスタイルがこの空間で継続していることを目の当たりにした。古い家屋が立ち並ぶ胡同に自家用の車が止められたり、ぼろぼろになった外側の灰色壁と相反して最新のエアコンが取り付けられていたり、現代風の浴室が別個に設けられていたりしていた。伝統と現代を横断する、北京市民の生々しい生活を見ることができた。このような光景から、北京という町が、マイクロ的政策によって開発と保存が並存し、時空間を行き来する都市であることを実感することができた。

こういった一番繁華している街の中で斬新なビルディングに囲まれた風景とまた対照的なのは、排除されつつある北京の底辺に暮らす外来労働者らの生活環境、北京オリンピック前に強制的に撤去された外来者らと「不適応者」らの生活場である。上述したような保護の対象となる北京市民らの古い屋敷と異なって、外来者らが住んでいる都市周辺の古い屋敷はどんどん開発のプロジェクトの中に加えられ、そこで暮らした人々は、より郊外の土地へ追い出されてしまう。

「不適応者」に関して、私の研究と結びついて説明する。私がフィールドワークを実施してきた調査地は望京という朝陽区に属する地域であるが、ちょうど北京の都心部の東側で四環と五環の間に位置する。2000年以前までは北京市の一郊外に過ぎなかった望京は、開発と外国の資本流入によって、現在はもっともモダンな都市に変貌し、多国企業が注目する地域となった。北京へ移住してきた朝鮮族は、最初は家賃や物価が安いということから望京へ定着したが、開発と外国人流入による物価や土地の価格の上昇によって、さらに北京の外郭で天津と北京の間に位置する通州区に撤退しなければならない状況におかれていた。実際に望京から通州区へ移動する人々が増えている。このような外来労働者はやむを得ずに北京の外側へ追い出される現状がある。

このように北京という都市は、守ったり開発すると同時に、奪うという行為によって作られてきた。グローバル化の中で巨大な都市として浮上する北京における都市開発、人口流動、エスニシティ、文化遺産といったできごとや概念をクロスさせることで、近代化が進む北京のダイナミックな現状をより深くみることができるだろう。

【谷村要(研究員)】

近代的建築が並ぶ北京のメインストリートは、近年の中国の成長を強く感じさせるものであったが、一筋裏に入ると広がっている(昔の景観を留める)胡同とのギャップもその分強く感じさせられた。

たとえば、今回訪れた前門の商店街の建物も北京オリンピック前にいっせいに「昔のままの景観で」建て替えられたのだという。建て替えられた伝統的建築の街並みは確かに整然としている。しかし、その建物の中にはほとんど商店は入っておらず、空っぽの状態である。この場所であつて営業していた商店は建て替えに伴いこの場所を去らねばならなくなったが、建て替え後も家賃の高さもあつてか(もしくは廃業したか)、この前門に戻ってきていないのだという。このような人工的な街並みのストリートから一筋入った路地では、雑然としつつも多数の商店が営業する景観が作り出されていた。このような「ギャップ」に大いに興味を抱いた。

また一方で、BNUの院生や教員に資料館を案内してもらう中で、この北京の調査に臨むにあたり、中国の伝統を捉える視点が必要であることも強く実感した。たとえば、胡同に多く立ち並ぶ四合院の現状を捉えるには、中国の歴史(特に近現代史)や道教文化の知識がどうやら必要のようである。それを我々は知らなさ過ぎたのではないか。この点についてはもう少し事前に知識を得る機会を作る必要があると考える。

資料館や胡同の案内を終えた後、参加者はそれぞれの興味に基づいて行動した。谷村は14、15日に「北京の秋葉原」といわれる中間村に行き、電腦街から「アニメ(動)の街」として変貌しているとされる当地を見てきた。まだ周縁部ではあるものの、街の一部に「趣味の空間」が出現しているのは確かであり、その点で秋葉原や日本橋、鷺宮町などで見られるような景観が北京で作られていることを確認できた。このような院生それぞれの研究関心に基ついて北京の街を観察するのもよいのではないか。

【荒木康代(研究員)】

今回はじめて北京を訪問して、その産業化、都市化、市場化の急速な進展に驚いた。まさに「資本主義国」中国を見たようであった。前門も観光を意識した再開発が進められ、オリンピック前の景観(帰国後見た前門のTV番組録画による)とは大きく変貌していた。正陽門から南に延びる中心街路は再開発され、大きく道路が拡幅されていた。店舗は再開発前の建築と同じような建築様式で建築され、壁面には昔の店舗の写真が掛けられていたが、空き店舗がきわめて多く、観光客は多いものの商店街としての活気はなかった。聞くところによると、家賃が高額なため入居する店舗が少ないらしい。一方、中心街路から左右に一筋入った、いくつかの道幅の狭い商店街はきわめて活気があった。大柵欄商店街などには1800年代後半創業の老舗も多く、むしろこちらの方が商店街としては盛況であった。ただし、オリンピック前には多かった飲食などの露店を見ることはほとんど無かった。胡同の四合院もすでに解体され更地になっているところや解体中で壁に覆われているところなどが多く、かなりの胡同や四合院が消滅したことが伺われた。

一方、紫禁城の北東部にある鼓楼周辺は胡同がかなり残っており、東煤廟胡同(炭屋・炭工場)など同業種町を伺わせる標識も多く、きわめて興味深かった。その標識からどのような職業の人々が住んでいたかも推測できたが、簡体字がわからないためその理解も限定的になった。基本的な簡体字を知っていればもう少し理解が深まったと思う。このことは、商業街の看板などについても言えること

であり、基本的な簡体字の事前学習が必要だと感じた。

北京郊外には高層マンションが林立していた。胡同から立ち退きを迫られた住民も団地やマンションへの移転となっただけで、しかし、その一方で、屋台や小規模の飲食店、商店もまだきわめて多い。このような小規模店の中には、いわゆる農民工と呼ばれる地方からの上京者も多いようだ。BNU 付近の屋台一部室内併設)は、羊串焼、内臓煮込み、いか焼き、ギョーザ・ラーメンの 4 店が共同経営をしていた。共同で経営することによって、テーブルや椅子を共有でき、どこでも注文できるという点で効率的だということだった。すべて同所で作っており、ギョーザもその場で作っているのを見ることができた。仕入れも通勤も自転車とのことだった。また、五金星市場では1~2坪程度の区画をたぶん賃借しているのだと思うが、衣料・雑貨等多くの小店舗経営があり、その店のこどもが遊んでいたり、店にいたりするなど職住一体が伺われた。

今回は前門地域すべてを見たわけではなく、きわめて限定的であり、また地図と照らし合わせながら歩いたわけではなかったため、見た感じの印象にとどまったが、それでも興味深い点は多々あった。今回は、あらゆる点で事前学習がきわめて不足していたが、今後の共同調査では事前学習を十分した上で、綿密なフィールドワークを行いたいと思う。

【山北輝裕(研究員)】

初日は、博物館巡り。博物館では、そこで働いていると思われる若者たちと交流した。博物館に行くなら(というか、調査に行くならどこでもそうだが)、「何のために」という、漠然としたものでもいいので目的が必要だが、今回は、問題意識が低かったように思う。昼食後に訪れた天安門広場へ向かう地下道に「乞食」がいた。なかには、おそらく「ハンセン病」ではないかとおもわれる人もいた。

午後からは個別行動をとった。わたしたちの何人かは、地下鉄(途中から地上)の東の果て、「土橋」にいった(そのまま東にいくと天津)。ここは、5~6環の地区であり、大きな道が村をまっぴたつにしている程度で、さほど開発がすすんでいない様子であった。「土橋」の胡同に入るにあたって、かなり緊張したが、意外に村の人たちが、私たちに無関心であることに驚いた。写真もおそろおそろとるが、無関心。

二日目、前門の商店街を歩いた。調査は1人でするものだ、という感覚をもつ私にとって、集団行動はむいていないようだ。途中何度も、イライラする(中国側にではない)。商店街は、たしかに、いろいろな中国の物産に心躍るものがあつたが、わたしたちは、「観光客」ではない。どうも、「おみやげを買う時間」と「調査の時間」との差がなくなっていたように思う(自分も含めて反省すべき)。こうした、態度は現地の人に敏感にかぎとられてしまうのだろうか、メンバーの1人は物乞いに執拗にせまられていた。

午後は、南の果て、4環あたりの地区に行ったが、ここは開発のまっただ中で、砂埃が舞い、呼吸がづらい。超高層ビルと胡同とのコントラスト。胡同の今後が気になる。休みの日ということもあつてか、若者たちがいきかう。胡同のなかに、かまえられたビリヤード台を中心に若者が集う。

さらにその後、北の果て、朝鮮族の住む街、望京(ワンチン)に向かう。望京西の駅からおりて、ひたすら、望京をめざし歩く。途中、団地を見つけたり、物乞いに会ったり、あまりに疲れ果てて、ドーナツを食べて休憩したり。意外にも、望京は高級超高層アパートが乱立する。サークル上に鉄道レールが敷かれた所に向かおうと、タクシーにのるも、運転手が場所を知らない。おりると、いわ

ゆる闇タクシーに囲まれる。あぶないので、避ける。

最終日、BNU の先生に連れられて、わりと綺麗な胡同を紹介してもらおう。観光地の近くということもあり、整備されている印象を受けた。昼ご飯を食べて、しばらくその観光地をひとりで歩いた。ひとりで歩いていると、ようやく日本の「ホームレス」に近い人を2人、みつける。路上で眠りについていた。あと、少し入った狭い道に、入れ墨屋やhip-hop と書かれた若者の服屋、あるいは ROCK (PUNK ! セックスピストルズのポスターには驚愕) の店などを見つけた。

やはり、5-6環あたりは、これから開発されるか、しばらくされないかというところだろうか。4環あたりで、若者もたくさんいそうな場所は、開発まっしぐらというところだろうか。そして北京中心の観光地近くは開発がほぼ完了しているという感じだろうか。

街中を掃除している多数の人々、あるいは誰が回収しているかわかならない胡同のゴミ、いったいみんなどこで働いているのか/働いていないのか。わからないこともたくさん。

映像をとるという行動についても考えることが多かった。今回、私は「ストリート班」のメンバーとして、どこかで定点撮影を、とおもっていたが(個人的には、とくに路上でトランプや将棋をしているところなどをとりたかった)、日程的に不可能だと感じ、あまり無理をしないようにした。そもそも、情けないことに、ビデオテープを忘れていたことが二日目に発覚する(したがってわたしは撮影できず…)。

ビデオカメラを四六時中まわすことへの、違和感は多少あった。すれ違う人々にとっては、ほんの5秒ほどのできごとである。それでも、やはり違和感はある。おそらく、その記録はきわめて貴重な資料となることは疑いえない。しかし、ストリート班の責任者として、撮り方については、なにかしらの約束事をもうけておくべきだった。日本における事前北京勉強会・ストリート班研究会を経たにもかかわらず、この点を徹底しなかったことは、反省したい(今後、これらの記録を使用する際は、許可を貰う等、聞き取りのデータを使用する際と同様、必要な手続きをとりたい。撮影したメンバー個人が今後、自分の名義で使用する際は、自分の「調査倫理」・手続きにもとづき使用すべきである)。

BNU のメンバーが日本へ来たとき、自分自身、「朋友」という言葉を使った以上、限界まで追求し、手伝えることは手伝えたい。また、なによりも、比較をするうえで、歴史的な検討が必須であると考ええる。ストリート班としても、「東アジアのストリートの現在」とあるが、「東アジア」という部分に関しては非常に弱い。したがって、なんらかの形で、個人的には北京班にかかわっていきたいし、学びの過程に参加したい(あるいは手伝えることがあれば影ながら協力したい)。

以上。